

雪

フォト劇場（71）

写真が生むものがたり

狩勝の峠越えると雪の舞う空はころびて雪散る散りる
伊藤てい子

月一いちで狩勝峠を越え、幾寅のクリニックに通つている。十一月、帯広は青い十勝晴れの空が広がつている。でも日高山脈の向こう、幾寅は同じ十勝なのにもう雪の中の白い町。毎年のことながらまるで違う世界に驚く。

うづもれし4メートルの積雪計さをさしさがす大雪の朝

佐藤弥生

四十年前の冬のこと。信越国境の津南町の中津川流れる段丘の上の小学校では、校庭の積雪計が一夜の大雪に埋没。雪中に掘り当て、竹尺を継ぎ足してその冬の最深積雪4m57cmを記録しました。



背を丸め彼がこちらへ来るようで雪積む枝の奥を見ている

川村りら

鳥取は、ひと冬に必ず一度は大雪が降る。平野部での積雪一メートルもよくあること。真冬の列島に西高東低の等圧線が五本あればそれは大雪寒波の知らせ。除雪道具を確認し、蜜柑籠をいっぱいにして身構えるのだ。

会葬の人札する母の背のたちばな紋に粉雪しまく

黒田邦子

父は2000年2月九十五で亡くなり、母はその十三年後一〇三で亡くなつた。二人とも死の際まで健やかに生きた。五人の子はいま七十代、八十代になり各々の老いの姿を生きている。人生は続く。